

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その18)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載十八回目となるこのたびは、第二十三章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号:18K00329」による研究成果の一部である。

二十三章

日が経つにつれ、アール卿と娘たちのあいだの遠慮は消えていった。ロナルド自身でさえ、なぜこれほど強い愛情を娘たちへ注ぐことができるのか不思議に思った。帰郷以来、彼は色々なことを改良していった。彼は自分の領地の不動産について特に色々と考えた。貧しい小作人たちが住

んでいる古びた借家は、美しいコテージに建て替えられていった。学校や養老院、教会なども、彼は改築したいと強く望んだ。アールズコート領と彼らの領主を、人々は温かく賞賛するようになった。

彼はまた社交の責務も忘れてはいなかった。旧友たちはアールズコートに招待され、隣人たちも温かい歓迎を受けた。彼には賞賛と敬意の的となった。以前とは異なり、彼の名声は高まった。春が近づくにつれ、アール卿は娘たちを広い社交界へデビューさせたいと望むようになった。付添人としては彼の母以上の人物はいなかった。ある朝ヘレナ夫人が、生活の拠点を街中へ移動させる提案についてアール卿に話をしていると、彼がいきなり話を遮った。

「母上」と彼は言った。「母上の宝飾品はどこですか？ 何ひとつ母上が身につけられているのを、拝見したことがないのですが」

「すべてしまつてあります」とアール卿夫人は言った。「お父様が亡くなられた時に。私は二度と身につけることはないでしょう。アール家の宝飾品は、現当主の妻が代々身につけて来たものであつて、先代の未亡人のものではありません。あの宝飾品は私のものではありませんよ。」

「拝見してもよろしいでしょうか？」とロナルドは尋ねた。「そのうちの幾つかはベアトリスとリリアンのためにリフォームできるでしょう。」

ヘレナ夫人はベルを鳴らして侍女を呼び、重たい宝飾品箱を持って来させた。ベアトリスはそれらを見て大喜びし、妹は歡喜する姉の様子を見て微笑んだ。

それらの宝飾品は王の身代金にも匹敵する程のものであつた。ダイヤモンドは一級品で、ルビーは真紅にきらめいていた。繊細な真珠はベルベットの台の上で青白く輝き、はかりしれない価値のエメラルドもあつた。中でも美しく高価なものの一つは、小さなダイヤモンドとオパール完璧な一そろいであつた。

「これらは」と、アール卿はこの高価な宝石を自分の手に取り上げながら「とても美しく価値があるものだ。このネックレスのオパールは類がないほど美しい。もとはイン

ドの王子^(注)の王冠を飾っていたもので、我々の祖先に遺贈されたのだ。この石が不運の石であることについては色々なことが言われ、フランス人は不幸の石と呼んでいて、だから私はそれがあまり好きではないのだが。」

「そのオパールを私にくださらない、お父様？」とベアトリスは笑いながら言った。「私は恐ろしい迷信など信じておりません。輝く美しい宝石類は、人生の必需品だと思いますわ。私はダイヤモンドのほうが好きですが、このオパールは本当に美しいですもの。」

彼女は手を差しのべたが、その指にオパールの指輪がはめられているのにアール卿は初めて気づいた。彼はその美しい白い手をとつた。

「これは美しい指環だね」と彼は言った。「すばらしいオパールだ。誰からもらつたのかな、ベアトリス？」

この質問は彼女にとって恐ろしい衝撃を与えた。彼女はこの指輪のことはすっかり忘れていて、ただ習慣で嵌めていたのだ。

ほんの一瞬、彼女の心臓は凍り付き、すべての感覚を失つた。そして適当な理由がみつけれられるよう落ち着きを以

て、ベアトリスは父の顔を微笑みながら見上げた。

「エルムスでいだいたものですわ」と彼女は簡単に答えて、聞いている三人が、ドラからもらったものだろうがそうは言いたくなかったのだろうと思わせるようにし向けた。

ロナルド・アールは、彼の美しい娘たちがそれぞれ最も好む宝石を選ぶ様子を微笑みながら眺めた。その好みの違いは彼を驚かせ、面白がらせた。ベアトリスはダイヤ、炎のようなルビー、紫のアメジストを選んだ。リリアンはただ、美しい青白い真珠と輝くエメラルドを好んだ。

「そのいくつかは随分流行遅れだから」とアール卿は言った。「ハント・アンド・ボスケルの店で新しいデザインに直そう。きみたちがロンドンに向かう前にきつと直してくれるだろう。」

ベアトリスはまずオパールの指輪を外し、嚴重にしまいで込んだ。彼女は父の質問から受けたショックでまだ震えていた。この恐ろしい嘘は、彼女を悩ませた。ほんの数時間の秘密の幸せのために危険をおかすとはなんと愚かだったことか——あれはただの嬉しがらせとお世辞で——愛などとは言えなかったのに。

ついに長いあいだ切望していたその時が訪れた。アール卿は街中の屋敷に拠点を移し、娘たちは社交界デビューの準備を始めた。あらゆる意味で、それは大成功となった。人々はこの美しい姉妹に魅了された。彼女たちはそれぞれがとも魅惑的で、しかも似ていなかった。ベアトリスは輝くように、彼女を見た人々の眼前に美しい夢のように現れ——リリアンは綺麗で優美で、ちょうど薔薇に対する百合のように、姉には似ていなかった。

彼女たちはすぐに人気者になった。どんな舞踏会や夜会も、どんな舞踊劇やコンサートも、彼女らがいなければ完璧とは思われなかった。画家たちはこぞって、この「百合と薔薇」「夜と朝」「陽光と月光」を描いた。詩人は彼女たちのソネットを創った。友人と崇拜者たちは、彼女たちを取り巻いた。ベアトリスは満足しきって深いため息をつきながら「これが人生ね」と言って、大いにこの状態を楽しんだ。

この年、エアリー伯爵が成人し、社交界の中心的存在になった。彼は結婚するつもりなのか、だとすれば相手は誰なのか、というのが、ベルグレイヴィア(ロンドンのウエストモンドのハイパークに続く貴族的な住宅街で、上流社会の代名詞となった)中の母と娘の関心事となった。長い間、これほど完璧と目される結婚相手の男性はいなかった。彼にはず

つと家族もなく独り身であったせいで、その資産は莫大なものになっていった。

この若き伯爵はスコットランドに広大な領地を有していた。リントン・ホールとクレイグ城というイングランドで最もすばらしい二つの館も彼のものだった。そしてまた、ベルグレイヴィアにある彼の邸宅を見た者は誰しも彼を羨ましがった。

若くて信じられないほどの資産家で、殊に親切で愛嬌がある、このエアリーの伯爵には、少なくとも五十ほどの縁談があった。だが彼はなかなか陥落されなかった。年頃の娘を持つ母親たちにとっては難題だった。彼は女性たちに望まれるままに、会話し、踊り、散歩し、乗馬もした。だが誰も彼の心を奪うどころか、好みだと思わせることさえできなかった。彼は恋をしないようであり、彼が変わることを期待する余地も無いようだった。ロンドンで最も美しく優美なレディー・コンスタンス・タックブルックは戯れに彼女の魅惑の武器をすべて使ったが、上手くいかなかった。黒髪の美女フローラ・克蘭ボーンは、二曲のワルツに賭けたが、彼から三言ほどお世辞を言われただけで失敗に終わった。エアリー伯爵は難攻不落と言われていた。

じっさいのところ、彼は地に足の着いた分別ある人間に育っていた。彼は財産目当てではなく、彼自身を愛して

れる女性に出会った時に結婚しようと思っていた。伯爵はこの理想を、美しく高貴で誠実なすべての女性たちのうちに探し求めていたが、まだ見つけられていなかった。

いたるところで彼はアール卿の娘たちの美しさについて耳にしたが、何の興味もわかかなかった。彼は何年も美しい女性たちのことを耳にし、目にしたが、ずっと失望してきた。多くの人々が、この「新たに現れた美人たち」に会おうとしていたが、彼は何もしなかった。彼女たちもまた他の女性たちと同じだろう、と彼は考えていた。

ある朝、何もすることがなかったので、エアリー卿はレディー・ダウンハムの華やかなグループの昼食会を訪れた。すぐに帰るつもりで、彼は早めに到着した。まだ数人の来客しかなかった。レディー・ダウンハムに儀礼的に挨拶をしてから、この若い伯爵は庭に出た。

それは稀に見る、よく晴れた美しい日であったが、彼は退屈しきっていた。この日はイギリスというよりはイタリアの気候のようで、明るく陽がふり注ぎ、空は青く空気は澄んで香り高く、明るく温かい空で歌うのにふさわしく、鳥がさえずっていた。

多くのテントから旗がひらめき、庭のあちこちで楽隊が音楽を奏でて、陽光きらめく空気に泉の水が戯れていた。エアリー卿は挨拶してくる相手に機械的に返礼しながら

歩いていった。

すると、ほどよい薔薇の茂みの陰にちよつとした休憩場所があるのが目についた。そこからは、楽しそうな人々のボートが浮かんでいる湖が一望できた。エアリー卿は、自分一人だと思つてそこに腰を下ろした。だが景色全体を眺めるために、邪魔になつた大きな枝を払いのけようとする前に、彼は薔薇の茂みの反対側にある休憩所の声が聞えてきた。

彼は図らずも澄んだ美しい声と、より豊かで音楽的で、たまに彼が耳にするモリバトの囁き声のような、そして楽しそうなもう一人の明るい声を耳にした。

「ここにあまり長く待たされずに済むと良いわね、リリアン」と、陽気なその声は言った。「レディー・ヘレナは湖に連れて行くと約束してくださつたわ。」

「楽しいわね」と返事が聞えた。「あなたはいつも楽しいことの中にいたいのではなくて？」

「そうよ」とベアトリスが言った。「孤独も静寂も私の人生にはもう十分だわ。ああ、リリアン、今は本当に楽しいわ。「あなたもそう思うでしょう、でも私ほど素直に認めないのね。」

かすかな音楽のような笑い声が響き、そしてあの美声が再び聞えた。

「リリアン、このロンドンの生活はとても素敵だわ。これこそが人生よーどの瞬間も輝いているわ。でもひとつだけ難点があるとすれば、思うことを口に出すことができないことだわ。」

「どういうこと？」とリリアンが尋ねた。

「わからない？」というのが返事だった。「レディー・ヘレナはいつも私に、彼女がおっしゃるところの“優美な落ち着き”を身につけるようにと話されるの。お気の毒なおばあ様！おばあ様のおっしゃるマナーの良さというのは、少くとも社交界では、すべての考えや感覚を無くしてしまうことのように思えるわ。私は個人として、何にも動じない感覚なんて嫌だわ。」

「おばあ様は間違いなくあなたを褒めていらつしやるわよ、ビー」と妹が言った。

「そうね」というのが気軽な返事だった。「ただ想像して、リリアン、昨日レディー・ケルンが彼女の大好きな若

「お友達についてのある話をされた時、思わず涙が浮かんだわ。客間には人がいっぱいいたけど、私は止められなかったの。おばあ様は、外に表れる感情をすべて押し殺すようにおっしゃったわ。でもその直後、ドルチェスター卿がレディー・エヴァートンの滑稽な話をされた時、私は笑ってしまつてー本当に、ものすごく可笑しかったの。でもそんな大声ではないわーなのに、おばあ様が私のほうをご覧になるのよ。“優美な落ち着き”なんて絶対に私には無理だわ。」

「そうなら、きつとあなたの魅力は半減してしまうでしょうね。」と妹は答えた。

「ときどき人は思っていることをとても言いたくなるのよ！私は我慢できないわ。レディー・エヴァートンが、例のうんざりするような笑顔で、ときどき自分自身のことを可笑しく思うって私にお話しされた時には、他の人たちも同じように思ってますよって言いたかったわ。以前、セント・ジョン夫人に、皆が彼女にお世辞を言った後で、彼女の態度を笑いものにしてるっていう話を夫人本人に話せたのは楽しかったわ。いつでも本当のことを口に出せるのは愉快なことじゃない、リリー？私は嘘をつくことや、虚言そのものさえ嫌いな。だからこそ、おばあ様は私のやり方を決してお認めにならないのでしょうけどね。」

「あなただったら率直で恐れを知らないのね！エルムスにいた頃、あなたが正しい時に正しいことを言うことを、皆がどのように思っていたか覚えているでしょう？」とリリアンが尋ねた。

「あの場所のことは言わないで」とベアトリスは答えた。「ここでの生活はまるで違うわ。私は大好きなのよーこのすべての明るさと楽しさが。私は今、気持ちよく満足しているわ。かつてはいつも落ち着かない気持ちで、人生を求めていたわ。今はすべての希望が叶ったの。」

ここで会話が途切れ、エアリー卿は誰が会話をしているのかわからなくなった。リリーも飾らないはつきりとした言葉でー真実を愛し、全ての偽りが嫌いだと語るこの声の主はどんな顔の少女なのだろうか。突然、この若い伯爵は自分が聞き耳を立てていたことに気づき、我に返って慌てて立ち上がった。彼は薔薇の茂みを押しつけた。最初はキングサリのしだれた金色の花々しか目に入らなかった。そしてすぐに香り高い花々の上に顔を伏せているきれいな頭が、そして彼が思わず驚きの声をもらしたほどの完璧な美貌が目飛び込んできた。

彼は多くの美人を見てきたが、この若い女王のような女性はいなかった。彼女の濃い色の輝く瞳は炎と光のようにきらめいた。長い巻き毛は彼女の頬にかかり、その誇り高

く美しい唇は閉じられている時は気高く、微笑んでいる時は優美で、完璧なラインを描いていた。高貴な額からは濃い色の巻き毛の房が波のように流れ落ちて白い首と形の良い肩を覆っていた。それは、心に思い描き、夢に見るほどの比類なく美しい、バラ色の理想的な顔立ちだった。

「いったい誰なのだろう？」とエアリー卿は思った。「ロンドン中の美女を知っていると思っていたが。」

会話の主の顔を確かめられたことに満足し、若い伯爵は、このきれいな薔薇の茂みを後にした。友人たちは、彼を少し変だと思ったに違いなかった。彼が会う人ごとに「今日はどうだが集まるのです？」と尋ねたからだ。彼はドルチェスター卿にも挨拶かたがた、他の人々にするのと同じこの質問を繰り返した。

「お答えはしかねますな」と卿は答えた。「私はよくは存じませんから。ただもし伯爵がこのパーティーの女王が誰かということをお知りになりたいのでしたら、お答えできますよ。アール卿の令嬢のベアトリス・アール嬢です。彼女はあそこにいます、ほら、レディー・ダウンハムと一緒に。」

示された方向に、エアリー卿の眼前から離れなかった面影があった。

「そうですよ」とドルチェスター卿は明るく笑った。「もし私が若くて独身だったら、彼女をそんなに長い間、ミス・アールのままにさせてはおかないのですがね。」

(以下、次号)

注1) 原文は、底本としてあるリプリント版では price となっているが、文脈上不自然であるため、Street & Smith 社版 New Bertha Clay Library No.70 の *Dora Thorne* (1900) を参照し、該当箇所をこれに従い prince として翻訳した。

注2) 原文はラテン語の *nil admirari* (ニヒル・アドミラリ) で、「何事にも驚かない」、「何事にも動じない」という意。